

# 名言で語る世界史②アジア編

国語科 島村 潤一郎

四月から三月まで、春夏秋冬、その季節に応じた詩歌を各週、古文の授業の頭に紹介するという「折々の歌」というコーナーを設けてみたことがある。その応用編として生まれた企画の一つがこの企画である。第二弾ということで、今回は「名言」の類をとり扱うことにしてみたが、ただ羅列するだけでは芸がない。というわけで古代エジプトから二十世紀まで、人間の歴史という時系列に沿ってそれらを並べてみた。今回は、ギリシア・ローマ編、アジア編、近代ヨーロッパ編と続くシリーズの第二部である。また「名言をつくろう」というコーナーも途中で設けてみた。以下の記録はここ何年か現代文の授業で行ってきたその企画の授業実践報告である。

キーワード：国語 言語活動 歴史

A；どーも。

B；どーも。というわけで、前回、「どーも」で始まる研究紀要なんて見たことないぞと思わず突っ込まれてしまった島村潤一郎です。

A；で、またやるんですか。

B；やります。

A；それにしてもどうしてまたこんな文体で？

B；実はと言うと今回、ちゃんとした文体で全く別の原稿を準備していたんですけど、読み返してみるといかにもよそ行きの服を着ておすましといった感じで、全然面白くない。というわけでそっちの方はお蔵入り、同時並行して書き進めていたこちらの方を敢えて出すことに決めました。

A；それにしてもどうしてまたこういう企画を？

B；要するに私って言葉のコレクターなんですよ。

ほら、小さい男の子って何でも集めるのが好きですよ。怪獣消しゴムだとか、ミニカーだとか、ビックリマンシールだとか、誰しもみんなそんなコレクションに躍起になる時期ってあるじゃないですか。私の小学生の頃もみんなそんな感じでしたけど、そういうのを横目で見ながら私ふと思ったんです。「言葉のコレクション」、これはいい

ぞって。何がいうって、駄菓子屋で毎日学校帰りにビックリマンチョコレートを買うなんて余計な金がまずかからない。それから収納スペースに困らない。図書館で本を読んで気にいった言葉をどんどん頭の抽斗にほうりこんでいけばいいだけ。鼻の下にうっすらと髭が生えるような頃になるとだいたいみんなこういうのを卒業するものですけど、そのまま長じてこうなったのが私と思ってもらえば結構です。「折々の歌」も今回の企画も私の幼少時の性癖が治らずただ自然とこうなっただけってところは、正直言ってありますね。

A；開高健も言ってますよね。「男は一生かけて少年時代の掌の中をかけまわっているだけ」だって。

B；私も今年で三十五ですけど、これは本当に強く実感しますよね。

さらについでに言うところもいろいろあります。もともと私という人間は、ただ単調に授業を進めるのがどうも嫌いな人間でして、毎回授業の中にいろんなコーナーを設けることにしているんです。「折々の歌（金沢中央高校研究紀要第18号参照）」、「超時空歌合せ」（本校研究紀要第48号参照）」、「オススメ本今月のベストテン」、「漢

字クイズ」,「語源クイズ」,とまあいろんな企画ものやってきましたんですけどそうした中で生まれたのが,この企画です。

A ; しかし,それにしてもどうして世界史なんですか。

B ; 一番最初の企画「折々の歌」,これは春夏秋冬という時系列に沿った形で様々な詩歌を紹介するというものだったわけです。もともと私は日めくりカレンダーなんかについている「今日の言葉」みたいなものが好きで,名言をとり扱うことは「折々の歌」の応用で自然と思いつきました。しかし漫然とただ名言を紹介するだけではやはり面白くない。そこで人間の歴史という時系列に沿ってそれらを並べ直してみるというところに今度はいきついたわけです。詳しいことは「名言で語る世界史①ギリシア・ローマ編」(金沢中央高校研究紀要第20号)の中で一度述べましたので,今回はその部分を再録させていただきたいと思います。

~~~~~  
B ; このあとの稿でも引用してあるんですけど,「歴史を学ぶ」のは「歴史に学ぶ」ために他ならないと,私なんかやっぱり思うんですね。「歴史」というのは 要するに昔から今までの人間の営為の積み重なりと相違ないんですけど,そうした「歴史」を紡いできたのは何者かと言うと,現代の我々と同じ生身の人間なんですよ。科学技術や知識の量というのは確かに格段のものになりましたけど,人間の本質というのは昔と比べてそうたいして変わっていない。怒り,笑い,悲しみ,喜び,恋愛,友情,欲望,嫉妬,争い,裏切り……人間の生活を取りまく諸相というのは,見事なくらい何も変わっていない。昔の人間がそうしたのとはほぼ同じことを,若干のシチュエーションを変え,日々我々は繰り返しているだけなのではないでしょうか。歴史物語なんかを読んでも,「そうそう,人間ってやつはやっぱりこうなんだよな」

とか「あ,そうそう,世の中ってそうだよな」とかいう感慨を持つことって結構ありますよね。あれなんですよ,私が大事だと思うのは。「歴史は繰り返す」という有名な言葉がありますが,同じ人間なんだから,やってることは今も昔も似たりよったり。それで私ずっと思ってきたんですよ。そうした歴史の繰り返しの中から,人間という生き物の一定の行動パターン,法則性,更に言えば,人間の真実みたいなものを引き出してくることはできないか……そして我々は自分自身の生きる指針としてそれを有効に活かしていかなければならないのではないかと……そうしたところにこそ,歴史を学ぶということの本当の意義があるのではないかと……まあ,そんなふうに。

A ; てなわけで「名言で語る世界史」と?

B ; 長い人間の歴史の中で,様々な先達たちが,人間に対して,人生に対して,社会に対して,様々な洞察と卓見を残してくれています。そうした人類の叡知のエッセンスとも言うべきものを授業でとりあげるというのは,非常に意味のあることだと考えます。そうすることによって,人間の歴史の流れを興味深く浮彫りにしていくことはできないかって,そんな思いでこの企画,秘かに温めていたんです。

~~~~~  
A ; まあだいたいわかりました。では前置きはこれくらいにしてそろそろ始めましょうか。

B ; はい。前回のギリシア・ローマ編に続いて,今回は「名言で語る世界史」②アジア篇です。

「スイス四百年の平和がいったい何を生んだ?  
たかが鳩時計さ。」

『第三の男』

A ; さて,まずはどちらから?

B ; とりあえず古代中国,春秋戦国時代から始めた

と思います。ちょっと場違いな印象を与えかねないところありますが、今回は映画『第三の男』からハリー・ライムの言葉を引用してきました。有名な大観覧車のシーンでハリーが言うこれまた有名な科白です。

A；これが中国紀元前の春秋戦国時代にどうつながってくるんですか？

B；このアイロニカルな言葉の裏返しですが、そのままあの時代に当てはまることになると考えるんですよ。アルプスの小国の平穏な歴史が生んだものが「たかが鳩時計」だけであったのに対し、あの時代は社会が飛躍的に発展し、様々な人物が輩出され、あたかも中国文化の沸騰期という観を呈するまでになっています。牛耕、鉄製農具による農業生産力の増大、貨幣の流通と商工業の発達、それから諸子百家と呼ばれる才能群が群がり出て、中国思想の黄金時代を成すまでになっています。この時代の相似形を、私はイタリア・ルネサンスに見てとることができるような気がします。春秋戦国時代が諸子百家を生んだように、あのルネサンスという時代もまた多くの天才を生みおとしています。ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロ、ダンテ、マキャベリ、ガリレオ・ガリレイ……。この二つの時代には、背景として一つの共通点があります。それは、ともに諸侯（都市国家）が乱立し互いに抗争を繰り返す乱世であったということです。産業の振興も、才能の招聘も、乱世の中で生き残っていかんがための一つの時代の要請としてあったわけです。確かに血を流しあう陰惨な戦争は困ります。しかしある程度の競争原理は、社会をいきいきとしたものに保つために不可欠のもののような気がします。これを全く失った社会がどれほど人間の意欲を失わせ、人間を骨抜きにするか、私も旧共産圏を旅して実際に見てきました。やはり相互の自由競争、切磋琢磨が歴史を前に押し進めてきたというのは、見落とすことので

きない重要な側面だと思います。

「狡兎死して良狗煮らる。」

『史記』

A；さて、そんな戦国時代もB C 221年、始皇帝によって終息を見、ここに初めての統一国家秦が成立します。

B；その秦も始皇帝の没後わずか数年で瓦解し、漢楚の攻防を経てB C 202年、劉邦によって再び中国大陆が統一されます。今回は漢の功臣、韓信にまつわる言葉をとりあげました。この韓信という人物は、名参謀の張良、卓越した行政官の蕭何とともに漢の三傑にも数えられ、とりわけ武功甚だしかった軍事の天才ですが、天下統一後、彼は謀反の疑いをかけられ、刑殺されてしまいます。政権を握るまで重宝した武略家という才能も、体制がためをしていく段になると、これはもう不用でしかない。不用どころか、これはもう百害あって一利なし、逆に大きな脅威になるんですね。いつ自分の権力の座が脅かされるかわからないし、たまったものじゃない。というわけで、敵を滅ぼし、政権を完全に手中に収めてしまうと、新たな権力者はかつての家臣や同志の在庫処分にとりかかる。そう、狩られる兎がいなくなると、今度は猟犬が喰われてしまうように。これは世の東西を問わない、歴史の一つの定型のようです。頼朝と義経、徳川幕府ととり潰しにあった数々の外様大名、明治新政府と不平士族、スターリンとトロツキー、ヒトラーとレーム、毛沢東と劉少奇・澎徳懐……。ケース・バイ・ケースでそれぞれ多少事情は異なりますが、概ねこの図式に当てはめて見るができるようです。上記の言葉は史記の中の言葉ですが、さすが司馬遷、現代にも通ずる人間の真理、歴史の真実をわかりやすい比喻で見事に突いていると思います。

「盛年重ねては来らず  
一日再び晨なり難し  
時に及んで当に勉励すべし  
歲月人を待たず」

陶淵明

A；漢から魏晉南北朝に移り、今回は六朝文化の中から陶淵明というわけですか。

B；この言葉は我々に学問というもののありようを考えさせてくれます。日本の教育はえてして「つめこみ教育」とか言われて指弾されがちですけど、では訊きますが、つめこめる時期につめこむものをつめこんでおかないで、いったいつ、つめこむって言うんでしょう？脳みそが海綿みたいに吸収力あるうちに、絶対これはやっておかないと駄目なんです。

A；まさに「時に及んで当に勉励すべし／歲月人を待たず」だと。

B；はっきり言って、大人になって頭が固くなってからじゃ、もう駄目ですよ。だいたい二十代も半ばを過ぎると、一日十万個の勢いで脳細胞が消えていくっていうんですから。私が中学、高校の頃、年輩の先生が口を酸っぱくして言ってたんですよね。「若いうちにできるだけ勉強しておけ。年とってから新しいことを始めてもなかなか身につかない」と。若い頃は私も「そんなもんなのかなあ」って感じで軽く聞き流していたんですけど、私自身、脳細胞が減りゆく今日この頃になって、「ああ、なるほどこういうことを言っていたのか」って身に沁みてひしひしと感ずることが多いですね。

A；「若すぎて全くわからなかったことがリアルに感じてしまうこの頃」ってなわけですね。

B；栄枯盛衰世のならいというやつで、人間というやつは必ず衰えていく。これは絶対避けられない運命です。じゃ、その時ものを言うのは何かと言うと、それまで積み重ねてきたストックなんです

よね。脳細胞が減っていくんだから、記憶の容量も確実に目減りしていく。でも銀行預金と同じで、貯めこんだ分が多ければ多いほど、それに比例して確実に金利というものが生じてくるわけですよ。要するに我々教員というのは知識の金利生活者なのかもしれません。目減りしていく分と金利がとんとんなら一定のレベルを保ち続けることができる。頭の中がすかすかになってしまった我々でも、何とか頭のやわらかな若い連中に対して先生面してやっていける。そして金利が目減りしていく分に追いつかなくなった時はじめて、凋落が始まるというわけですよ。だからこそ私なんか強く思いますね。ストックを作れるうちにできるだけ多くのストックを作っておくべきだと。でないと、先行って困るぞ、人間伸びないぞと。

A；やはり伸び盛りの身体に栄養が必要のように、**伸び盛りの若い脳にも「知」という栄養が絶対必要なわけですよ**ね。「ゆとり教育」だ、カリキュラム削減だなどと言い募り、一方でそうした栄養を与える機会をどんどん奪い、若者の知的発育不全とも言える状況を作っておきながら、もう一方で大学生の学力低下を憂うという現在の状況にはどこかおかしいものがあると確かに私も思います。

B；最後にもう一つ補足させて下さい。今、若い間にストックを作っておくべきだというような言い方をしましたけれど、だからと言って、大人になったらその上にあぐらをかいてただストックを食いつぶしていくだけでいい、と言おうとしているわけでは決してありません。私思うんですけど、この年齢になったら現状維持という考え方は即、後退につながる、**つねに新しいことに挑戦し続けてやっとなことかっかつつで現状維持、なんじゃないでしょうか**。

A；何てったってもう能力ないんですから（笑）。

B；だから私なんか思います。こうした知的的好奇心

とチャレンジ精神を失った時、その人にとっての  
本当の老化が始まるんだと

A；なるほど。

「馬上、枕上、廁上」

欧陽脩

B；今回は唐宋八大家の一人、欧陽脩の言葉です。

これは何を述べたものかということ、どういう時に  
いいアイデアを思いつくかということ、を簡単に  
述べたものです。机に向かってうんうんと唸って  
いる時よりも、馬（乗りもの）に乗っている時、  
寝床で体を横にしている時、個室でよきによき  
とあれを捻り出している時、そういう時の方が人  
はピカッと閃きやすいものようです。個人的に  
自分を振り返ってみると確かにそうで、アイディ  
アというのは「捕まえるもの」ではなく「待ち伏  
せるもの」だという気がします。

アイデアという話が出たので、ついでにもう  
少しそれに関する話をしておきたいと思います。  
欧米の教育は「独創性を培い、生徒の個性を伸ば  
す教育」であるのに対し、日本の教育は単なる  
「つめこみ教育」に墮してしまっているというよ  
うなことがよく言われるようですが、あれも日本  
人にありがちな舶来思想至上主義的なところがあ  
ってどうかと疑問に思います。これは私の持論な  
んですけれど、「独創性」と「つめこみ」という  
のは決して対立する概念ではなく、むしろ底の方  
でつながりあったものなのではないでしょうか。

A；ほほう、と言うと？

B；これを説明する前に独創性なるものに対する私  
の考え方をまず明らかにしておきたいと思いま  
す。こうなんです、私の考え方は。「この空の下、真  
に独創的なものなど何一つない。」こう言いき  
ってしまうと、それはおかしいと反論される方が必  
ずいると思います。でも考えてみてください。例  
えばピカソ。あの描法を我々は独創的なものと考

えるかもしれない。しかし彼だってセザンヌだとか  
いるんな先人の影響を受けてあのような作風を  
確立したわけです。ゴッホ然り。ダリ然り。しか  
し私という存在はこの世界で本当に一つしか存在  
しないオリジナルな存在だとさらに反駁される方  
もいると思います。しかしこれだってよく考えて  
みてください。あなただって私だって真にオリジ  
ナルな存在では決してないんです。母親と父親か  
らDNAの半分をそれぞれ貰い受け、そうして今  
ここにあなたという個性が、私という個性がで  
きあがっているわけです。私なる個性を構成する要  
素は決して新しいものではない。すべて親のそれ  
のコピーでしかありません。アデニン、グアニン、  
シトシン、チミンという四つの塩基の配列、組み  
合わせ、それが個性なるものの正体です、つまり  
私が強調したかったのはこの点です。もしオリジ  
ナリティなるものが仮にあるとしたならば、それ  
は「組み合わせの新しさ」に他ならないのだと。  
さあ、そこでちょっと考えてみましょう。ここに  
手持ちのカードが10枚の男とそれが5枚の男がい  
たとしましょう。ここからカード3枚を任意に抽  
出し、いろんな組み合わせを作ることになったと  
します。前者は120通り、後者は10通り。手持ち  
のカードが2倍になるだけでバリエーションは10  
倍近くになるわけです。新しい組み合わせを作り  
出すのにどちらが有利か、もう言うまでもありま  
せん。独創性なるものを創出するのも理屈として  
はこれとそう大差ないのではないのでしょうか。つ  
まり手持ちのカードがほとんど準備されてないの  
に、ただ馬鹿の一つ覚えのように「独創性を」、  
「生徒の個性を」などと連呼し続けてもそれは全  
くのナンセンスだということです。はっきり言っ  
て世間で「独創的」と見なされるような仕事をし  
た人間はみんな若い頃に無茶苦茶勉強しているわ  
けですよ。「独創性」と「つめこみ」は底の方で  
実はつながりあっていると私が言ったのは今言っ

たような意味合いにおいてです。

A；だからやっぱり若いうちにつめこめるだけつめこんでおけと。

B；陶淵明のところで語ったのと同じ結論になってしまいましたが、全くその通りだと思います。

「一杯目の酒は健康のため

二杯目の酒は快樂のため

三杯目の酒は放縱のため

四杯目の酒は狂気のため」

アナカルシス（古代スキタイの王族）

B；唐まで来たところで中国史はいったん措いて、少し他の地域にうつることにしましょう。

A；時代は大きく前後しますが、古代スキタイですか。でも今までは完全に傍流とされ、はしょられがちだったこういう中央アジア、アフリカ、中南米といった地域の古文明も、最近は以前よりきちんと教科書にとりあげられるようになってきているみたいですね。

B；さてこの言葉ですが、人物のアナカルシスというのは、スキタイの王族でギリシアに留学などもしていて、当時としてはかなりのインテリだったみたいようです。でもこの言葉に出会った時は、思わず苦笑してしまいましたね。二千年以上も前の人の言葉ですが、今の我々にもそのままびったりくるじゃありませんか。ステップの野営で角杯を傾ける古代騎馬民族の酔いどれと、駅前赤ちょうちんでくだを巻いてるサラリーマンがそのまま一つに重なるようで、古代人に妙な親しみを覚えちゃいましたね。何て言うか、連中も今の私たちと同じように盃を重ねたんだなって感じで。この言葉、一杯一杯と酒が入るにしたがって変貌していく人間のありさまが目浮かぶようでいいですね。だいたい私は好きですね、酒。酩酊する感じが好きっていうのも勿論ありますが、それ以上に、

その人間の本性を酒が自ずと浮かび上がらせてしまうのが好きってのありますね。私はよく言うんですよ。世界でいちばん正直な人種は「酔っぱらい」だって。そもそもアルコールという言葉は、語源的に言うと「ひきだす」という意味なんだそうです。平生個人を押さえつけているたかが酒を飲むことによって外れ、抑圧されてたものが内面からいろいろ「ひきだされ」てくるんですよ。よく「酒の席のことだから、忘れてくれ」とか、「酔っぱらってのことだから、気にしないでくれ」とかいうのありますけど、あれ、反対ですね。全く、逆。酒が入ってのことだからこそ、かえって人の本音が出るわけですし、うわべを繕ったその下で他人が本当に何を考えてるかよくわかる。だから素面の時以上に、こういう時は神経張り巡らせて人の言動をチェックしといた方がいい、というのが私の考えです。醒めた時よりも酔った時、意識よりも無意識の方がより多くの真実を語る**ことがあるものです**。

A；エラスムスも言ってますよね。「酒中に真あり。」

B；全くそのとおりだと思います。

「寒さと暑さと、飢えと渴えと、風と太陽の熱と、虻と蛇と、これらすべてのものにうち勝って、犀の角のようにただ独り歩め」

『スッタニパータ』

A；さて古代インド、ここはやっぱり仏陀の言葉ですか。

B；妥当なところでしょう。この言葉の収められた『スッタニパータ』には、仏教というものの基本性格がよく表れていると思います。仏教、キリスト教、イスラム教というのがとりあえず世界の三大宗教というのになっていきますけど、私が思うに、ブディズムの本来のありようというのは、宗教と言うよりもむしろ哲学の方に近いのではないで

しょうか。(彼の死後、系統だてられ、組織化され、伝播していったそれは疑うべくもなく宗教ですが。)それが証拠に、この仏陀自身の言葉『スッタニパータ』のどこをひっくり返しても、「神」という言葉は出てこない。イエスは「神の子」であり、マホメットは「神の預言者」であった。しかし仏陀のみは我々と同じ「人間」として地上にとどまっている。その苦悩する姿は、絶対を希求する宗教者のそれではなく、明らかに「人間いかに生くべきか」を模索し自省する哲学者のそれです。ですから宗教、とりわけ昨今の新興宗教の持つ閉鎖的な結社性というものに対して、私はかなり懐疑的です。仏像を作ってそれに向かって手を合わせなさいだとか、教団を作りなさいだとかいうようなことを仏陀は一言も言っていない。釈尊はあくまでも「ただ独り歩め」とおっしゃっているわけです。しかしそう言われても人間というのは弱い生き物ですからなかなかそういうふうに行っていくことはできない。だからこそ本来そうでなかったものが次第に「宗教」化していったわけです。しかしこうして考えてみると仏陀の考えとブディズムは大きく違うものだということがよくわかります。

人はえてして絶対普遍の変わらない真理なるものがどこかに厳として存在すると考えがちですが、それは違うんですね。仏教、キリスト教、ともにそうですけれど、それらが伝播していく過程の中で、真理の方が人々に受け入れられやすい形へと、おのが自身の姿形を変えていくものなんですよ。はじめに真理ありき、では決してなく、はじめに「真理」という自らの拠り所を必要としてしまう人間ありき、なんです。

「コーランか、貢納か、剣か」

B；宗教の話が出たついでにもう一ついきましょう。

A；イスラムですか。

B；まず最初に、宗教というものに対する私の基本的スタンスを示しておきましょう。それはこうです。「あらゆる宗教は虚構である。」だってそうでしょう。神の言葉がマホメットに下されただとか、キリストが死者を甦らせただとか、そんなのちょっと現実的な感覚で考えれば「お話」だっていうの、すぐわかるじゃないですか。こういう絵空事という言い方をすると、何だか宗教を馬鹿にしているように受けとられてしまうかもしれませんけど、ちょっと待って下さいよ。そういうわけでもないんですよ。つまりですね、私が言いたいのはですね、宗教も読み物と同じように考えればいいんじゃないかってことなんです。世にいろんな読み物がありますけれど、みんながみんなお話の中のことを現実と混同して読んでるわけじゃない。お話が全て現実に基づくものでなければならぬという決まりはどこにもなくて(そんなこと言ってたら、SFなんかどうなるんですか)、要は、それによって無聊をかこっていた時間が楽しく過ごせたり、何らかの魂の慰めになったり、とかいうことでしょ。宗教もそれと同じなんじゃないでしょうか。たとえ虚構であっても、それが個人により豊かな生をもたらすなら、それはそれでいいじゃないか、というのが私の考えなんです。(それが人々の間に憎悪や反目、不和をもたらすくらいだったら、そんなの最初っから要らないですけど。)要は、それがリアルかフィクションかではなく、それをよすがにしてどれだけの人がどれだけより良き生を送ることができるか、その効用・効果でしょう。ですからね、つまるところフィクションなんだから、別にむきになって一つのフィクションで全世界を塗りつぶそうなんて考えなくてもいいんですよ。例えばね、どれだけ熱狂的なミステリ・ファンがいたとしても、日本中の書店の本棚をミステリで埋め尽くそうなんて馬鹿なこと考えない

でしょ。時代小説ファンもいれば、ミステリ・マニアもいるし、SF狂もいるし……でいいのと同じように、キリスト教を信じる者、イスラムを信奉する者、仏教に帰依する者……いろいろあってそれでいいんですよ。他者が別のフィクションを信奉するというただそれだけで、歴史上、数限りない人の血が流されてきましたが、こうした狂信に何よりも必要なのは、やはり寛容という美德だと思います。

さて、上記の言葉は、イスラムが勢力を拡大していく途上で一つのスローガンとなった有名な言葉です。イスラムに帰依するか、税を支払うか、さもなくば矛を交えるか、三者択一をその土地の人々に迫ったわけです。ここで注意したいのは、納税という条件付きではありながら、その支配下において他の宗教の信仰が許容されたという点です。こうした寛容さに、私は好もしさを覚えます。まあだからこそ、イスラム教はこれほどの短期間に広い地域に浸透したんでしょう。

## コーヒーブレイク

B：はい、それではここでちょっとコーヒーブレイクです。

ただ名言を紹介するだけでは芸がないと思ったので、こういうコーナーも設けてみました。題して「名言を作ろう」。そのものずばり、生徒にも名言を作ってもらおうという企画です。パート1とパート2があるのですが、授業で使ったプリントを次と次のページに載せておきたいと思います。

因みに評価は生徒の相互評価です。提出された作品をプリントにして配り、各自にいいなと思ったものを五つ選んでもらいました。たくさんの票を集めた歴代の優秀作をついでにここに並べておきたいと思います。

・夢を追うのが少年。現実に追われるのが青年。

- ・嫌な出来事に出会うのが不運。いつまでもその状態で思い悩んでいるのが不幸。
- ・ロマンティストのふりをしているのが女。リアリストのふりをしているのが男。
- ・恋とは光だけを見ること。愛とは光も影も受け入れること。
- ・未来とはあとの時間の一点に過ぎないが、将来とは自分のビジョンである。
- ・「目」は体の一部です。「瞳」は心の一部です。
- ・女の勘は数学の授業に似ている。あたって欲しくない時ばかりあたってしまう。
- ・男の本音はミニスカートに似ている。見えそうで見えない。
- ・好きな人のいない毎日は制服に似ている。悩まなくていいけど何か物足りない。
- ・五限目は宝くじに似ている。夢が多い。
- ・男の恋愛は水彩画に似ている。上から重ね塗りしても（新しい女）、下の画（前の女）がにじみでてしまう。
- ・恋愛は眼鏡に似ている。すると世界が変わる。
- ・片思いはジェスチャーゲームに似ている。いくら頑張ってもわかってもらえない。下手すると別の意味で受け取られる。
- ・親の愛は雨に似ている。降ると嫌がられるが、降らないと生きていけない。
- ・ちょっとした嘘は小さな切り傷に似ている。大したことはなくても意外と痛かったりする。
- ・心のこもってない言葉は修正液で消した字に似ている。裏から見るとすぐ見透かされてしまう。
- ・恋は盲目ではなく遠視である。遠くへいけばはっきり見えてくる。



# 名言をつくらう

## パート1 較べてみれば

常日頃、我々は何気なく日本語を使っています。似たような意味を持つ言葉がいろいろありますが、我々は意識するにしろ、しないにしろ、どこかでそれらを使いわけているものです。例えば「恋」と「愛」。どちらも英語にすれば〈LOVE〉ですが、この二つは決して全く同じ意味内容をカバーするものではありません。それが証拠に「家族愛」という言い方はするけれど、「家族恋」という言い方はしないですね。「文化」と「文明」だってそうです。「文化祭」という言い方はするけれど、「文明祭」という言葉はない。やはりこうした両者の間には微妙なニュアンスの違いがあるようです。

今回は二つの言葉を比較して、両者の違いをあぶりだしてみようという企画です。

まず参考に二人の小説家の文章を見てみましょう。

### 「文化」と「文明」

ここで、定義を設けておきたい。文明は「たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい。つまりは普遍的ではない。

たとえば青信号で人や車は進み、赤で停止するこのとりきめは世界に及ぼしうるし、げんに及んでもいる。普遍的という意味で交通信号は文明である。逆に文化とは、日本で言うと、婦人がふすまを開けると、両膝をつき、両手で開けるようなものである。立ってあけてもいい、という合理主義はここでは、成立しえない。不合理こそ文化の発光物質なのである。

司馬遼太郎『アメリカ素描』

### 「青年」と「成年」

「青春」ということばがあります。ある社会が若いか、年をとっているか、若者に向かって開かれているか、閉じられているかとしょっちゅう議論される。それでいろいろ考えるのですが、青春ということの定義は百人百様だと思えますけれども、私なりに定義すると、「自分の気に入った、自分に適した職業を見つけるまで、どんどん自由に職業を交えていける条件と心のある時期」を「青春」と云うのじゃないかしら。職業を選んでしまうと、それはもう青春ではなく、「青」が「成」という字になる。職業を選んだときからアダルトになるんじゃないですか。

開高健

較べてみる材料はいくらでもあります。「文化」と「文明」はどう違うか？「少年」と「青年」はどう違うか？「少女」と「女」はどう違うか？「きれい」と「かわいい」はどう違うか？「冷酷」と「残酷」はどう違うか？「旅」と「旅行」はどう違うか？「未来」と「将来」はどう違うか？それから万古不易の大テーマですけど、「男」と「女」はどう違うか？あなたなりの定義を聞かせて下さい。

☆ さて、それでは問題です。次の形で名言を作ってみましょう。

	が	
--	---	--

	が	
--	---	--

H		No.		氏名	
---	--	-----	--	----	--

# 名言をつくらう

## パート2、 比喻表現をつかって

まず次の文章を見てみましょう。

「自由は山嶺の空気に似ている。」

自由は自由。山嶺というのは山の頂のことです。

「自由＝山嶺の空気」うーむ、何のことか、さっぱりわかりませんね。けれどもこの言葉のあとには、こういう言葉が続くのです。

「どちらも弱者には堪えることは出来ない。」

自由と言うと、とにかくありがたいものと考えてしまいがちですが、そうでもない面もあるんですよ。何をやってもいいという状況に置かれると、今度は人間、自分が何をやっていいかわからなくなって困ってしまう。強いしっかりとした意志を持った人間は自分で自分を律しながらちゃんとやっていくものですが、そうでない人間は易きに流されてずるずると駄目になっていく。ですから「弱者には堪えることは出来ない。」山の頂上近くの空気というのも、希薄で、強い心肺機能を持った人間でないと高山病になってしまいますよね。だから「自由は山嶺の空気に似ている」というわけなのです。

「自由」と「山嶺の空気」。突拍子もない組み合わせでしたが、こうして言われてみると、なるほどと納得できますよね。全く違う別のものの共通点をとらえ、一つに結びつけ、表現する。こういう修辞法を「比喻」と言います。

さて、参考問題を見てみましょう。

- A、「人生は一箱のマッチに似ている。( )」
- B、「恋愛は戦争に似ている。( )」
- C、「片想いはレコードでいえば、裏面の曲のようなものです。( )」
- D、「女は猫に似ている。( )」

A～Dの空欄にはどんな言葉が入るでしょう。次の選択肢の中から選んでみて下さい。

- イ、「どんなに一生懸命唄っていても、相手にはその声がきこえない。」
- ロ、「重大に扱うのはかばかしい。重大に扱わねば危険である。」
- ハ、「呼ぶと逃げる。そして呼ばない時にやってくる。」
- ニ、「始めるのはたやすいが、終わらせるのは容易ではない。」

できたでしょうか……？

☆ さて、それでは次の形で名言をつくってみましょう。

は  に似ている。

H	No.	氏名	<input type="text"/>
---	-----	----	----------------------

「兵を養うこと千日、  
これを用いるは一朝にあり」

『水滸伝』

A；さて、時代は明に入って、今回は水滸伝からですか。

B；これは「信長の野望」だとか「三国志」だとか、あの手のゲームをやっていて実感した言葉です。人はえてして決戦の場に臨んでそこで全てが決するというふうに考えがちですけど、それは違うんですよね。決戦の場にのりこんだ時点で既に勝敗は決している。要はそれまでの過程の中でどのように勝ちの体勢を作るか、なんですよね。そこに至るまでの一日一日が、実はと言うと「日々是決戦」なわけですよ。

で、ふと思ったんですけど、受験勉強というのもこれと同じなんじゃないでしょうか。試験会場に足を踏み入れた時点でもう当落はほぼ決まっているというふうに腹をくくった方が逆に緊張しなくていいんじゃないでしょうか。要は三年間の積み重ねをどう遺憾なく発揮するか、でしょう。高校の三年間を日に換算するとちょうど千日ちょっとじゃないですか。

A；「学力を養うこと千日、これを用いるは一朝にあり」ってわけですか。

B；まあ、そんなところですね。

すべての赤ん坊は、神様がまだ人間に絶望していないというメッセージを持って生まれてくる。」

タゴール

A；一挙に二十世紀まで来てしまいましたね。

B；今回は二十世紀アジアを代表する文学者タゴールに登場してもらうことにしました。

十何年間、アジアやヨーロッパをぶらぶらと本当がいい加減な暮らしを送ってきた私ですけど、

そんな私も遂に人の親になったので、ここは子供のことについて語らせてもらうことにしたいと思います。子供が生まれたばかりの頃、わが女房が一度このようなことを申しておりました。

「仏教では、全ては無である、だから現世における様々なものへの執着を捨てよ、などという言い方をするけれど、もしゴータマ・シッタルダが女だったならそういう考え方には決して到達しなかったであろう。全ての存在は〈無〉へとたち還る、これは確かに人の世の真理ではある、しかしこれは真理の半分でしかない。何故ならばその逆もまた真なり。〈無〉から全ての存在は生まれてくるのだ。今まで〈無〉だった存在が日増しに大きくなり、文字通り胎動を始め、それがやがてこの世界に生まれ落ちてくる。特に女はそういうプロセスを自分の体の中でじかに体験する。だから我が子への執着を捨てよと言われても、そんなことは土台無理なんだ。このあたりにゴータマが男であったが故の思想家としての限界があったと言えるのではないか。」

そういうことを聞きながら、私、思ったんですね。私、小学生の頃、不思議に思っていたんですね。この世の中にいるのは男と女、半分半分、能力的に見てもほぼ同じ。しかし歴史の教科書なんか見てみると、政治、経済、文学、芸術、科学、思想、哲学、どの世界でも名を残しているのは少数の例外を除いてほとんどが男性。これはやはり男という性の優秀性の証左なのかと考えてきたんですけど、大人になって考え方が大きく変わりましたね。必ずや死ぬこととなる人間は、みんな大なり小なり自分という人間が生きてきた証を何らかの形で残したいと考えている。女は明確な形でそれを残すことができる。しかし男にはそれができない。そうした男の決して癒されることのない存在の不安、欠落感、不全感みたいなものが男をしてあくなき創造へと向かわしめているのでは

ないか。だから先に述べたようなことは、男の優秀性の証左としてよりも劣等性の証左として見た方が妥当なのではないかと。

A；そう言えば、ニーチェが『この人を見よ』の中で書いていますよね。女という生き物をどうやって救済していけばいいのか。その方法は一つである。それは子供を産ませることである。これはある意味で真理ですよ。けれど、この言い方、逆にすると、こうなりますよね。

B；女には救済の道がある。しかし、男という生き物が救われる道はないと。

「敵意によって敵意は終わらない。友愛によってのみ敵意は終わる。」

サンフランシスコ講和会議でのセイロン代表の言葉（釈迦の言葉よりの引用）

A；第二次世界大戦が終わって、サンフランシスコ講和会議ですか。

B；ずっとやってきたこのアジア編もこの言葉が最後のシメということになります。

A；さすが敬虔な仏教国セイロン（現スリランカ）らしい言葉ですね。

B；あの国もあの戦争では日本から少なからず被害を受けたのですが、講和会議の席上、対日賠償権の放棄を表明する時に引用したのがこの言葉だったとされています。

A；そう言えば、同様に蒋介石はどこかで「怨に報ゆるに徳を以ってす。」という「老子」の言葉を引用していましたね。

B；このあたり終戦の数日前に攻め込んできて六十万近くの日本人を抑留したどこの国とは大違い。このあたりにアジアの懐の深さを感じます。

A；というわけで極めて簡単な形でアジアの歴史を概観してきたわけですが。

B；『水滸伝』からいきなり二十世紀のタゴールに

飛ぶあたりだとか不満なところがまだまだあります。そういうところをもう少し何とか形を整えたいと思っています。そうです。最後に次回予告をおきましょう。次回は「名言で語る世界史③・近代ヨーロッパ編」です。またいろんなネタを準備しています。では。